



■ テーマ名

漢代の簡牘を中心とした行政文書の研究

■ キーワード

秦漢、木簡、中国古代の文書行政

■ 研究の概要

漢代の西北辺境地帯に位置する甘粛省の居延・敦煌・肩水地区から出土した簡牘(約5万件)には、異民族侵入に対する辺境警備の日常が記されており、簡牘の記録を読み解きながら漢帝国の文書行政の実際を復元する研究をしています。

私たちの中国古代史に関するイメージは、司馬遷の「史記」に描かれた暴虐な秦の始皇帝像や、シルクロードの交流を開く武帝の西域経営など、ロマンに満ち後世のバイアスが入り込んでいます。砂漠の砦跡から出土した1次資料からは、広大な領域を支配する「合理的な政策」の実態が浮かび上がってきます。中国史における政治制度の基礎となっていく秦漢帝国の統治システムや行政制度の実態を解明することで、中央と地方の関係や官僚制についての長い歴史を知り、現代中国が当面している諸問題の理解につなげたいと考えています。



■ 他の研究／技術との相違点

簡牘を史料として扱うには、一定のトレーニングと用語や形態に関する独特の知識が必要となります。

■ 今後の展開、実用化へのイメージ

「史記」「漢書」などの編纂された漢籍による歴史研究に対して、当時の行政文書そのものの記録は、文献の省略割愛した日常の様子を表し、動かぬ証拠としての迫力に満ちています。文献史料の記載と出土史料との照合や比較が、これからの中国古代史研究に求められていきます。

■ 関連業績(特許・文献)

・「漢代郡太守の持つ人事権について - 地方長吏の欠員を視点に -」(2003富谷至編「辺境出土木簡の研究」所収)

■ 研究者から一言

簡牘史料が記す日常の行政から「古代を舐めてはいけない」と実感できます。